

ドル高と一部円高、持続と反動調整にらむ

中東、円安対応、米指標、日本の有事影響など焦点

今週の為替相場は全般的なドル高と一部通貨に対する円高に関して、持続余地と反動調整をにらんだ展開となる。週間予想はドル/円が157.50-161.50円、ユーロ/円が181.70-185.80円。前週は米イランの武力衝突に関し、早期の停戦期待が後退したことや米指標の底堅さなどにより、全般ドル高が持続となった。対ドルでのポンド、スイス・フラン、カナダ・ドル、NZドル等の通貨下落を受け、対円でもこうした通貨が連れ安になっている（円は上昇）。今週は中東情勢や日本の当局の円安阻止対応、米指標、日本の中東有事影響などが焦点になる。

米イラン衝突、戦闘激化と停戦の兆しに一喜一憂

今週の為替相場で注目されるのは、米国・イスラエル対イランの武力衝突と中東有事の動向だ。前週にはトランプ米大統領が1日、交渉継続と同時に「今後2-3週間、イランを激しく攻撃する」と脅しをかけ、早期の停戦期待が後退している。

トランプ氏は5日、イランに対し、ホルムズ海峡の事実上の封鎖の交渉期限を1日延長し、7日午後8時（日本時間8日午前9時）までに解除するよう要求した。合意しなければ、「発電所も橋も一つも残らないだろう」と警告している。

今週以降は交渉期限を含めて、交渉の難航と戦闘の一段の激化となれば、為替相場では全般的にドル高が持続となりやすい。前週にかけては対ドルで、ポンド、スイス・フラン、カナダ・ドル、NZドル等の通貨下落が持続。リスク回避とあいまって、クロス円取引でもこうした通貨が連れ安となっており、中東有事が続く限りは、こうした通貨の対円での下落圧力（円は上昇）が意識される。

一方で週明け6日のアジア時間には、「イランの仲介者、45日間の停戦に向け瀬戸際の働き掛け」（米アクシオス）といった報道が見られた。今週以降、停戦交渉の進展やトランプ米大統領による一方的な勝利宣言などが見え始めると、全般的にドルは反落となる。

その場合、円相場は初期反応として、ドル/円でのドル安・円高とクロス円での円の連れ高（対円での非ドル通貨安）による円全面高の可能性がある。しかし、二次反応としては対ドルでの非ドル通貨の反発やリスク選好による米日の株高などにより、クロス円で非ドル通貨が上昇（円は下落）。ドル/円でも円高が抑制されたり、リスク選好で円安・ドル高に振れるなど、円全面安の展開があり得る。

為替相場のドル/円では、日本の当局による円安阻止対応が注視される。160円超え方向に急ピッチでドル高・円安が進む局面では、日本の政府要人による口先介入のトーンアップや、4月27-28日の日銀政策会合に向けた日銀の利上げ地ならし強化（日銀幹部発言やマスコミへのリーク報道など）のほか、レートチェック、実弾介入といった円安阻止対応が注目される。

ただし1月23日のレートチェック以降、為替市場では介入警戒感が2カ月以上の持続となってきた。ドルの高値圏では、国内輸出企業など「ドル売りの必要性が

が、3月以降の中東有事と原油高などを受けて、物価の上昇が焦点になる。

＜日本の中東有事影響＞

日本の中東有事影響としては円安・原油高と悪い物価上昇の抑止に向けて、4月27-28日の日銀政策会合にかけては日銀の利上げ観測が高まりやすい。短期的に円安の度合い抑制や円高の要因となるものだ。

一方で日本では電気料金やガソリンなどの価格上昇対策として、政府の補助金等による財政支出の持続が焦点になっている。こちらは日本の財政悪化と国債の信用懸念により、円安の要因となる。

前週末からは5月の大型連休明けに向けて、日本の政府内で国民や法人にガソリンや電力使用の節約、節電を要請する案が浮上してきた。5月以降の日本の景気の悪化材料となり、5月以降の日銀の利上げに障害となる。その点で日銀については、4月27-28日に向けた利上げ観測が円安抑制や円高材料となる一方、4月利上げの織り込みが進むに連れて、「5月以降の日銀様子見」が意識され、ドル/円、クロス円で円の戻り売り（ドルなどの外貨が下落する局面では押し目買い）が漸増していく可能性も無視できない。しかも5月以降は米欧など海外の中銀で、利下げ休止や利上げ地ならしが注目されてくる（外貨高・円安の要因）。

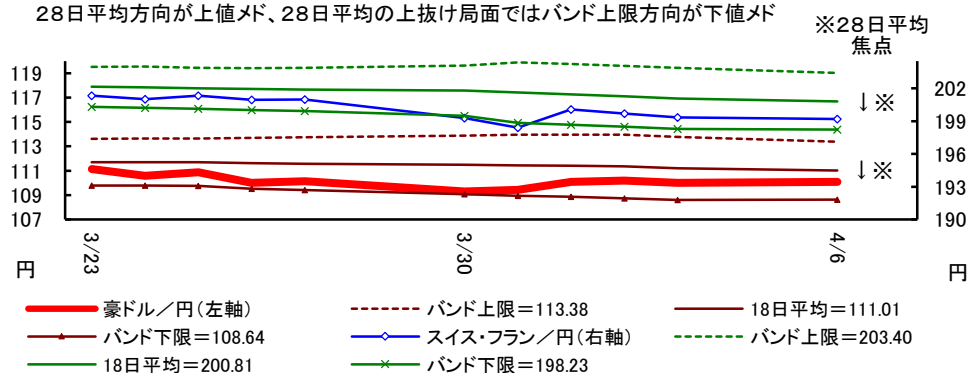
日本の貿易面では3月以降、ホルムズ海峡の通航障害により、日本の原油・ガス・重要物資などの輸入が遅延や減少となっている。輸入減少はドル買い・円売り手当ての減退とドル高エネルギーを抑制させる一方、今後、海峡の通過や代替ルートなどで輸入が反動増となれば、ドル高やドルの下値切り上がりの潜在要因となる。

さらに日本では原油・ガス・重要物資などの備蓄を取り崩し、一部はアジア諸国にも支援提供が検討されている。その分だけ日本では先行き「備蓄放出の穴埋め補充余地」が生まれている。中長期スパンで先行きの輸入増とドル買い需要の増加余地、ドルの下限切り上がり要因となりやすい。

豪ドル/円とスイス・フラン/円の日足;28日移動平均を中央値のボリンジャーバンド

28日平均を下抜けの局面では、バンド下限方向が短期的な下値メド

28日平均方向が上値メド、28日平均の上抜け局面ではバンド上限方向が下値メド



お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。本レポートの内容は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。